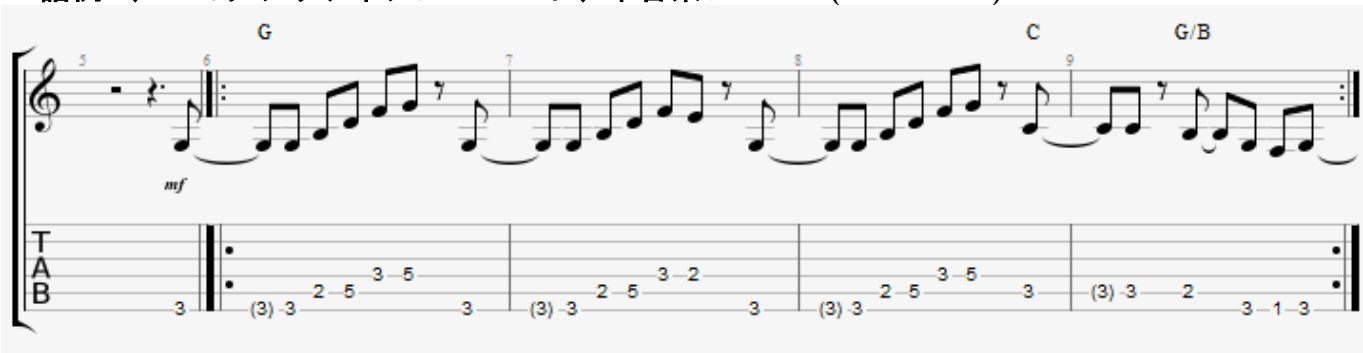
vol.24　ミクソリディアンスケールの使い方について　～その 3～

では、vol.24、始めていきましょう。

今回でミクソリディアンは最後になります。早速、実践譜例を見ていきましょうか。

まず、基本的な事として、ミクソリディアン・モードを作り出す為には、全体で使う音(出てくる音)をミクソリディアン・スケールにすればいいわけですね。

譜例 1、G ミクソリディアン・モード、単音系フレーズ(BPM～160)

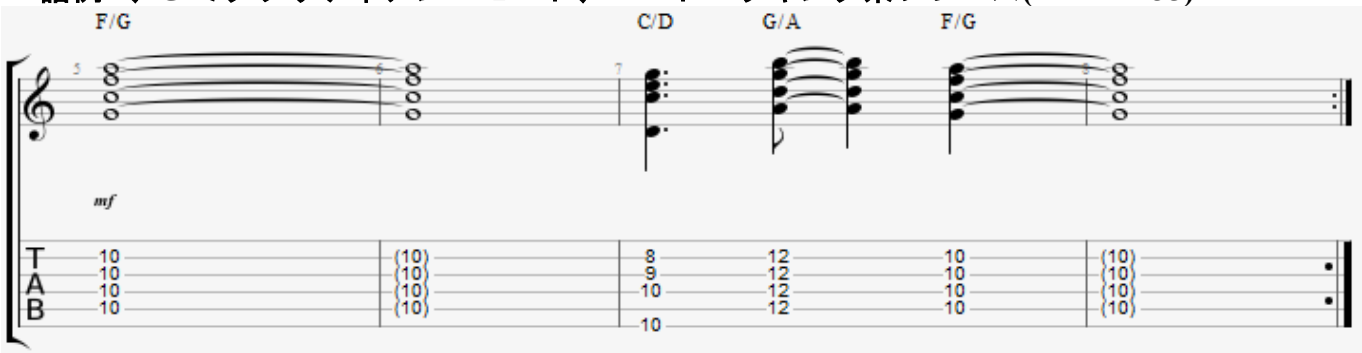


これは軽快なロックをイメージして作ったフレーズ(リフ)です。

例えば、ジョー・サトリアーニ等の楽曲にこういった雰囲気のものがありますね。

これを録音するなどして、その上で G ミクソリディアン(＝C メジャースケール)を弾いてみると雰囲気が掴めるでしょう。(※逆に G メジャー(アイオニアン)スケールでは合わない事も確認してみましょう)

譜例 2、G ミクソリディアン・モード、コードバッキング系フレーズ(BPM～135)



こちらは、実質 X7sus4 系のコードのみでミクソリディアンを作り出したものです。

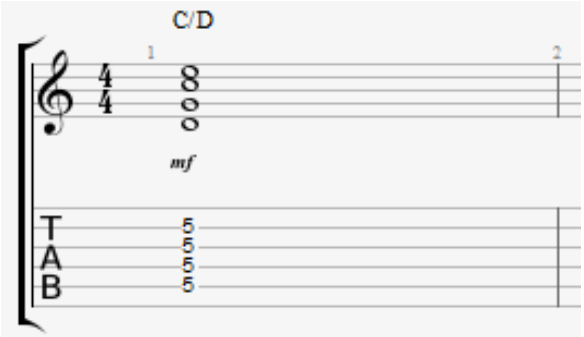
全 2 回のテキストでも紹介しましたが、それぞれ構成音が、F/G→G9sus4、C/D→D9sus4、G/A→ A9sus4 のような形になっています。
(※もしくはそれぞれ X9(11) 的な構造から 3 度と 5 度を抜いた様な形)

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

この「I / ♭VII」の形のコードは、厳密に考えると X7sus4 とは違うものですが、ギターで弾く場合、通常はそこまで気にする必要もないでしょう。

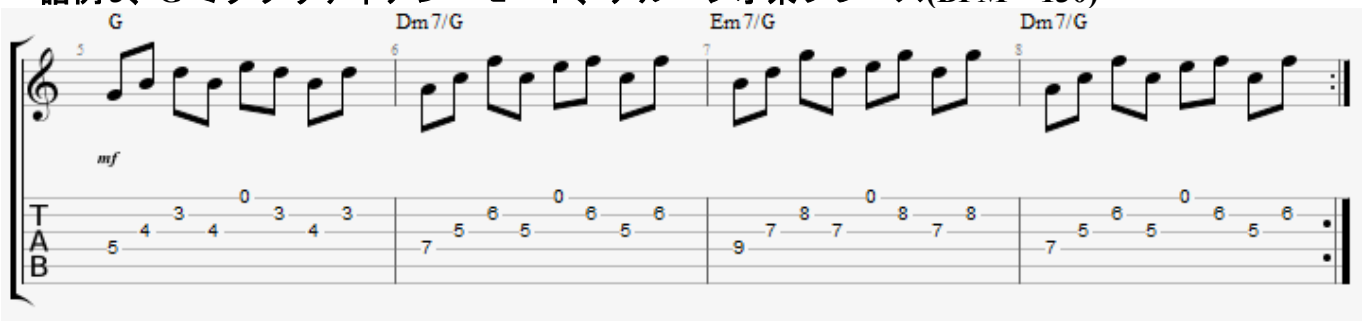
後、本来 C キーのダイアトニックコードとしては、D 音ルートのコードが Dm7、A 音ルートのコードが Am7 になりますが、「I / ♭VII」の形にすると 3 度が抜けるのでメジャー or マイナーが関係なくなりますね。

ちなみに、譜例 2 の C/D のコードはこのヴォイシングでも良いでしょう。



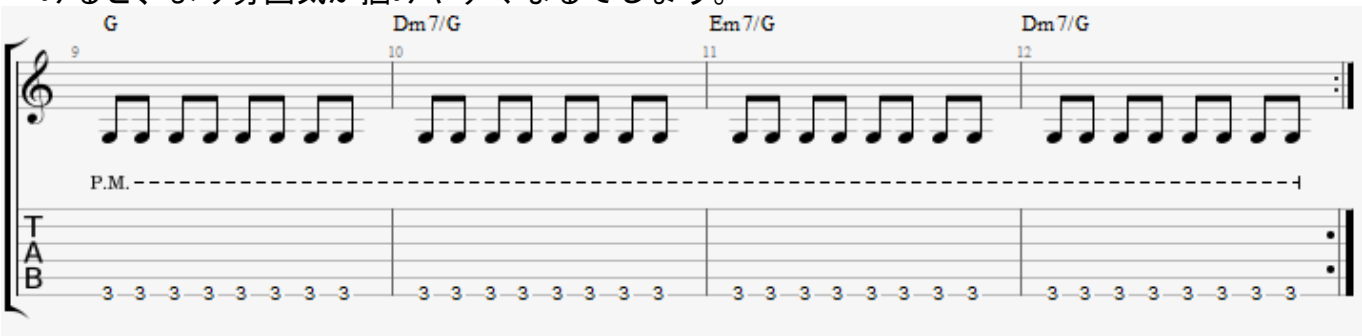
このヴォイシングにすると、譜例 2 は全て同じ押さえ方で平行移動するだけになりますね。特にフュージョン系の楽曲などで使われる事があるので覚えておきましょう。

譜例 3、G ミクソリディアン・モード、アルペジオ系フレーズ(BPM～130)



続いてアルペジオ系のフレージングです。ヴォイシング自体は 2～4 弦を使ったトライアドの形ですね。

上の譜例ではベース音を鳴らしていないので、例えば以下の様なパートと同時に演奏してみると、より雰囲気が掴みやすくなるでしょう。



Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

ちなみに、譜面に想定しているコードを表記していますが、それぞれ Dm7/G を F/G、Em7/G を G6 の様に見ることも出来ますね。

と、言う事で、ミクソリディアンの題材を 3 つほど出してみました。

結局のところ、過去にやってきたモードもそうですが、狙ったモードを作り出せているのならば、フレーズ自体は自由です。

モードを楽曲で使おうとする場合、大きく分けると、

1、コード進行やバッキングで特定のモードを強く形成する

2、コード進行やバッキングでは縛りを緩くしておいて、メロディやリードでモードを形成する

の 2 つのパターンになるでしょう。

前者は、今回載せた 3 つの譜例の様な場合で、後者は、例えばバックでは G コードだけを指定しておき、その上で G アイオニアンや G ミクソリディアンを選べるような場合です。

この辺り、その時の狙いによって、どういう方向に寄せるかを選ぶと良いですね。

■どこから来た X7 なのか？

さて、ミクソリディアン・モード自体の解説は以上なのですが、そもそも、主にその上でミクソリディアンを使う事になる、「X7」のコードについて少し考えてみましょうか。

例えば、アドリブなどの勉強をしていると、「X7 のコードの上では複数のスケールが使える」と、言う様な解説を見ると思います。

通常であれば、「XM7 上では(主に)アイオニアンかリディアン」など、ある程度数が絞られるのですが、X7 の場合のみ、オルタードやディミニッシュ系、ホール・トーンなど、出てくる数が多いのですね。

これついては、先に結論を言ってしまえば、

『X7 コードを形成できる構成音を持つスケールが複数あるから』

と、言う事が理由です。

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

要するに、「tonic(root)から見て、M3rd、P5th、m7th にあたる音を含んだ(もしくは近い構造の)スケール」がそれだけある、と言う事ですね。

メジャーキーの場合、X7 は 5 度の位置に、ミクソリディアンスケールに対応した状態で現れますが、マイナーキーの場合は 5 度に、Hmp5↓スケールに対応した状態で現れます。

この時点で、X7 を形成できるスケールが 2 種類存在し、さらにメロディックマイナーのダイアトニックコード等を見るともっと増えます。

※メロディックマイナースケールのダイアトニックコードとモードスケール

Ⅰ mM7	**メロディックマイナー**
Ⅱ m7	**ドリアン♭2nd**
♭Ⅲ augM7	**リディアン♯5th(リディアン・オーギュメント)**
Ⅳ 7	**リディアン♭7th(リディアン・ドミナント)**
Ⅴ 7	**ミクソリディアン♭6th**
Ⅵ m7(♭5)	**エオリアン♭5th(ロクリアン♮2)**
Ⅶ m7(♭5) or Ⅶ7(♭5)	**スーパーロクリアン or オルタード・ドミナント**

(※赤字が X7 系に対応しているもの)

ホール・トーン・スケールも、構成音が、

tonic、M2nd、M3rd、♯4th、♯5th、aug6th(=m7th)

となっていて、X7 に近いコードが形成できます。

ちなみに、♭5th と♯4th はテンションとしては♯11th、♯5th は♭13th と、どちらもオルタード・テンションと異名同音になるので、トニックに解決する X7 コードの上で各スケールが使える、とこういう理由です。

この辺り、具体的な使用例や、スケールの選択基準などは別途配布している【教科書】の後半でやっている事なので、そちらも参考にしてください。

結局のところ、少し大雑把にまとめると、一見ワケが分からなそうな話でも、スケールの構造とコードの構造が同じか近しいものが関連付けられている、と言う事ですね。

これらを感覚的に理解する為には、ある程度の知識が必要ですし、調性音楽とモードの両方の観点から分析できることが重要です。
(※そもそも、単旋律としてのモードの方が、歴史的には先ですが)

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved

さて、長らく続いたモード奏法の解説も、今回でおしまいです。

多くの場合、「モード奏法の解説」と言うと、このテキストで言えば vol.10 以降の各スケールと絡めた使い方から説明されます。

ですがやはり、一番重要なのは、vol.1〜9 でやった、「そもそもモードとはどういうモノなのか？」と言う部分です。

ここと調性音楽のロジックを対比できて初めて、実際のプレイでモード的なものを選択できるのではないかと思います。

なぜなら、「リディアンはこう使う、ドリアンはこう使う」みたいな説明しか受けていないと、調性音楽との差異を明確に認識できず、どこでどのモードを使う(≒使う旋律を変える)、と言う決断がしにくいはずですから。

最終的には、表現は自由に行うものだと思うので、 基本的な秩序を理解しつつも、何をどうするか？の判断は一人ひとりに任されています。

そういった時、1 つの基準や体系として、ここで学んだことを活かしてもらえれば嬉しく思います。

では、「ギタリストの為のモード奏法」は今回で以上になります。

ありがとうございました。

大沼

Copyright (C) 2016 shunichi onuma All Rights Reserved